本と地域の情報誌

県北 どらくろあ

第99号　2024年6月1日（毎月1日発行）

木次（きすき）線ストロール⑨　出雲三成（みなり）駅

「国の名勝、天然記念物と奥出雲の名家の邸宅」

取材日は5月20日の月曜日。五月晴れ、昨年秋からスタートした木次線ストロールだが、雪や雨の日が多く、こんなに晴れてくれたのは初めてだ。沿道の田んぼは田植えを終えたものが多く、水面に青い空が写ってキラキラ輝いている。

庄原の自宅から車で1時間20分ほどで亀嵩（かめだけ）駅に到着。ホームで列車を待っていると、対面の林の中からウグイスの鳴き声が聞こえてきた。

9時18分発の列車に乗車。黄色と水色のツートンカラー、黄色は木次線のきすき色、水色は出雲神話で重要な役割をする川を象徴している。先客はなく、わたし一人。インバウンドも関係なしか。亀嵩川の渓谷沿いを進んで、少し長いトンネルを抜けた先が出雲三成だった。乗車時間は9分ほど。

駅舎は近代的な建物に変わっている。映画の『砂の器』（1974年）が撮影された当時の駅舎の写真が、『砂の器』と木次線（村田英治）」に掲載されているが、木製の駅舎に円柱の赤い郵便ポスト、駅前には公衆電話ボックスがある。懐かしい写真だが、今でも映画の中では訪問することができる。

出雲神話にちなんだ駅の愛称は「大国主命（おおくにぬしのみこと）」。三成をふくむこの辺りを古代では三澤郷（みざわのさと）と言い、大国主命がこの地に住まわれて、御子の阿遅須伎高日子命（あじすきたかひこのみこと）との逸話が記されている。

駅舎の中にある「奥出雲町観光協会」で情報収集、パンフレットもたくさんいただいた。レンタサイクルを利用することにした。電動アシスト自転車を選択、4時間で720円、1時間超過する毎に300円加算される。

強化プラスティック製のヘルメットを装着、簡単な操作方法を教えてもらって出発。電動自転車に乗るのは初めてで、漕ぎ出しがグンと加速するので少しとまどうが、運転時は普通の自転車感覚で、当たり前だがペダルが軽い。坂道でもさほど負荷がかからないので快適だ。腰痛持ちなので、徒歩だと躊躇するような距離も大丈夫。

駅前の国道314号線を横断して斐伊川の橋を渡る。県道25号線を上ると「名勝鬼の舌震」の標識が見えてくる。田植えを終えた棚田から、蛙の鳴き声が聞こえてくる。「鬼蕎麦」の店の手前を右折する。鬱蒼とした森の中にある宇根駐車場まで駅から25分ぐらい。

鬼の舌震（したぶるえ）は、斐伊川の支流大馬木川の約2kmにわたるV字渓谷。黒雲母花崗岩地帯

「名勝鬼の舌震」は巨岩、奇岩がゴロゴロ

発行：どら書房
〒727-0012
庄原市中本町 2-1-10

誌面デザイン：ROUTE183
協賛：九日市愛好会